

3章 まとめと考察

一部ではあるが益田川に関する地域の民話について、取材・考察を行ってきた。紹介した民話の内容・構成について、また、民話の舞台となる河川について考察した点をまとめてみる。文中に表示している番号は、2章で紹介している民話の番号に対応している。

1 民話の構成について

(1) 人間と異形との出会い・奇跡の体験

水資源を確保するために先人たちが益田川流域で生活を営み、その中からさまざまな民話が生まれてきた。川に関する多くの民話の特徴として、人間と人間との物語よりも、人間と異形の者たちとが会う話、あるいは日常では考えられない特殊な出来事が起きる話が多い。

今回調査した民話をまとめた次頁の[表]を見ると、人間に化けた蛇(1-1)やイワナ(5-1、8-2)、蜘蛛に化けた蛇(2-1)、生き物の姿をした神や仏(6-1、7-2)といった異形の者たちや、カッパ(1-2)や鬼(4-1)といった想像上の生き物が登場する。また、山や滝や淵(3-2、4-2、6-2)に祈願をすることで雨が降ったり、必要な椀や膳が準備されるといった奇跡が実現する。

物語の中で龍や蛇が登場するのは川の形が洪水のたびに変わり、蛇や龍が動くようであるため、そのような生き物を登場させたのではないだろうか。

魚ではイワナの登場頻度が高い(1-1、5-1、7-1)。柳田國男の『魚王行乞譚』では、イワナが僧になるという話は御嶽山麓に同じような話がみられ、美濃・信州にもあるという。イワナは川の「大いなるもの、または強力なるもの」と考えられていた。「拳動の猛烈さ、殊に老魚の眼の光の凄さを認められてゐた。…よくよくの場合でない」とさういふ偉大なものの目に触れることはないために、これも常には深い淵の底に、一種の龍宮を構えてあるものと考えたのであろう」と記している。

(2) 季節について

イワナの話(5-1)に初午団子が登場するが、これが一年でもっとも早い季節であり、温かくなるに従い、民話の数は増えていく。現在は最も寒い季節だが、かつて初午は旧暦の二月だったので春先の行事であった。つまり、益田川の民話は春から秋にかけて、生き物(異形の者たちを含む)が、水浴びをしたり(1-2)、飛び込んだり(8-1)できる季節の話が多い。冬期間の民話は極めて少なく、久々野で「女淵」という話を確認しただけだった。

(3) 話の類似性について

今回の研究を通して、それぞれの地域独自の物語と思われていたものが、異なる地域でも伝えられていることを確認した。「孝池水」(6-3)が特徴的だが、自分たちの地域の似たような地形に置き換えて、話が創作されている(どの話がオリジナルかは不明である)。商人や歩荷などによって、面白い話が口伝され、語り継がれてきたのだろうか。

「ちんまが池」(1-1)の話のように遠く離れた地域と同じ話もある。「ちんまが池」の話は、イワナを食べた小三郎が、のどが渇き水を飲み続け、大蛇に変身する。この話は、秋田県の八郎潟の話に似ている点があることを確認した。視点を広げると、近隣地域だけでなく、遠く離れた地域にも類似した話があることがわかるが、このような話は地域の商人や歩荷がもたらしたとは考えにくい。旅人や修行者、あるいは芸能者が伝えたのだから。

[表]今回調査した益田川関係民話の分布と概要 ※ () 内は関連する話・地域

番号	物語	地域	登場人物	登場する異形・こと
1-1	ちんまが池	高根	おちん、小三郎、原助	大蛇[おちん]
1-2	吉助淵	高根	水浴びする人	カップ
	かわっぱ	高根	水浴びする人	カップ
	(カップに会わないまじない)	(朝日)	水浴びする人	カップ
	(たか橋のがあらんべ)	(金山)	馬方・村人	カップ
	(ガーランベ)	(馬瀬)	水浴びする人	カップ
2-1	蜘蛛だ淵	朝日	歩荷[ぼっか]	蛇[蜘蛛]
	(蒲田の力持ち石)	(朝日)	力持ちの男	足跡や一文銭の跡
2-2	龍宮淵	朝日		乙姫
	(龍宮が淵)	(門和佐)	ある人	乙姫
3-1	曲取岩	久々野	反保の百姓と橋場の百姓	力持ち庄助
	(お手玉石)	(久々野)	村人	力持ち庄助
	(牛岩)	(久々野)	村人	力持ち庄助
3-2	釜淵	久々野	村人	椀、膳
4-1	鬼退治地蔵	小坂	村人、旅僧	鬼、地蔵
4-2	釜ヶ淵	小坂	姉・弟	釜
	(滝上の雨乞い)	(小坂)	村人	観音様のお札
	(観音滝)	(小坂)	村人	観音様
	(権現山)	(萩原)	地域の人たち	権現様[山の神]
4-3	朝六橋	小坂	大坂の金持ち、番頭、善兵衛	輝く玉
4-4	力持ち小太郎	小坂	小太郎	仁王様
4-5	がたがた橋	小坂	金右衛門	亡霊
5-1	ダンゴ淵とイワナ	萩原	村人	イワナ[坊さん]
	(池谷の青どん淵)	(久々野)	与作夫婦	イワナ[坊さん]
	(イワナの怪異)	(小坂)	庄右衛門	イワナ[坊さん]
	(よのなか岩)	(萩原)	地域の人たち	よのなか岩
5-2	水よぶ鯉	萩原	村人、和田様	鯉の彫り物、矢の彫り物
6-1	しらさぎ伝説	下呂	村人	しらさぎ、薬師如来
6-2	椀貸せ淵	下呂	里の人	椀、膳、龍
6-3	孝池水	下呂	左近、母	琵琶湖の水
	(醒ヶ井の水)	(馬瀬)	左近、母	醒ヶ井の水
	(醒ヶ井の水)	(金山)	右近、父	醒ヶ井の水
7-1	波切不動	金山	中切区の某	不動像
	(西上田の地蔵)	(萩原)	上田村	地蔵
7-2	鶏鳴滝	金山	姫、村人	鶏
8-1	八百比丘尼	馬瀬	吉兵衛	龍宮
8-2	かいだん淵	馬瀬	住職	イワナ[母子]

2 民話の舞台としての川について

(1) 外部世界との境界としての益田川

倫理教科書（数研出版）の『日本の風土と社会』には、村落共同体の景観について、「近くの平地は日常生活の場（生活世界）であり、身近な日常の世界である。かなたの海原や奥山は非日常的な場であり、見知らぬ外部の世界である。外部の世界は神々の住むところとされ、神はそこから内部の世界に来訪し、祟りや豊穰をもたらすと考えられた」とあり、「（低山、海辺や島、）川、道は、日常生活の場（内部の世界）と見知らぬ外部の世界との接点であり、二つの世界を橋渡しする辺境世界である」と記述されている。例えば、川上から流れてきた桃太郎は、外部世界から内部世界にあらわれたものである、とされる。

この考えから益田川を考察してみると三つの外部世界があるのではないかと推論する。一つは上記のように、最上流域である山の中であって、日常生活が及ばない場所である。3000mを超える乗鞍岳・御嶽山をはじめ多くの山々や滝は信仰の対象になっている。このことは地域の行事からも確認することができる（4-2、7-2）。人間の生活圏でない地域は民話の舞台となるのではなく、信仰対象としてあがめられてきた。



久々野町から見る乗鞍岳(9月5日)



鈴蘭高原から見る御嶽山(9月5日)



御嶽山濁河登山口の御嶽神社
(8月9日)



御嶽山飛驒頂上のさまざまな石像
(2012年10月6日)

二つ目の外部世界は他の集落である。益田川沿いにある集落は、河岸段丘面が広がった比較的安全な地域に形成されてきた。広い段丘面がなく、河川の氾濫が大きい地域には集落は成立しない。集落と集落は河川と道路を通じてつながっているが、交通路や交通手段が現代のように発達していなかった時代、日常生活は自分たちの集落で完結しており、物資は自給自足ならびに商人や運送業物によってもたらされるものだけだった。ハレの日の行事も集落ごとに行われた。例えば、祭礼の日に演じられた歌舞伎の舞台は各集落に存在していた。

飛騨地方のような山間部にあつては、少し離れた集落への移動は困難であるため、他の集落もまた外部世界といえるのではないか。民話の例を挙げると、小太郎に救われた仁王様（4-4）は、隣の集落から流れてきたが、集落の交流は民話の中に描かれず、仁王様は小坂に安置される。境界としての河川の向こうは、見知らぬ世界であり、村から郷、郷から郡となるにつれて人々が交流する機会は極めて少なかったと言えるのではないだろうか。

三つ目の外部世界は、内部世界を流れる益田川にあつて、人間がたどり着けない場所、例えば川の底深くにあったと考える。各所に残る龍宮の話（2-2、6-2、8-1）は、外部世界の深い淵の中に、異形の者たちが存在していると考えられていたからである。また、温泉や清らかな水が湧き続ける奇跡的な話（6-1、6-3）は、その水源が外部の世界であり、川を通してつながっていると考えたからではないだろうか。覗き見ることができない世界が境界である川を通して、民話として生まれてきたのではないだろうか。

（2）橋に関する民話について

淵とともに橋に関する民話も多いことを確認した。橋は、道をつなぐ重要な交通路であり、橋に関する話は益田川流域全体にありそうだが、地域差がみられる。高根地域から小坂地域まで益田川上流地域の民話の舞台では、「朝六橋」（4-3）や「がたがた橋」（4-5）のように橋そのもの、あるいは「龍宮橋近くの龍宮淵」（2-2）のように、橋の近くが舞台になっている話が多くみられるが、萩原以南では橋に関する話が極端に少なくなる。これは、益田川の川幅が広くなり、橋よりも渡し舟を使った移動の方が一般的であり、橋の数も少なかったからと考えられる。橋を架ける技術が未発達であり、また、洪水によって橋が流されてしまうリスクを考えると、川を渡るのに船を使ったほうが効率的だったのだろう。



萩原町村の渡し図
（『斐太後風土記』萩原町村）



塚田の渡し跡（8月11日下呂市森）

(3) 現代の河川と民話

益田川は典型的な河岸段丘を形成しており、古い集落は段丘面に形成されてきた。ダム建設や河川の改修による水量の管理によって、水害が抑えられるようになると、護岸工事や土地改良によって川岸に近いところに農業地域や工業地域が形成され、川の兩岸をつなぐ橋がほぼ等間隔に建設されてきた。現代の益田川は人間の管理下に置かれ、これまでの河川の役割をさらに向上させ、快適な生活を作り出している。

今後、干ばつや洪水といった民話のような出来事が起こることは想像できないが、地域で何が起きていたのかを民話を通して確認することで、地域の地理や歴史を明らかにすることができる。このことは、私たちの暮らしの原点を確認することにつながるだろう。



河岸段丘上にある羽根集落
(4月30日下呂市萩原町)



明治期に益田川の西岸に開発された羽根新田
(4月30日)



農業用水を確保するための羽根地区の取水口
(5月7日下呂市萩原町)



取水口から引いた水路から羽根新田の水を引く
(5月7日下呂市萩原町)



東上田ダム(8月15日下呂市小坂町)



下原ダム(8月30日下呂市金山町)